

第4回定例研究会 開催挨拶

2022年6月5日 沖縄県立埋蔵文化財センター 研修室

会長：永津禎三

ただいまから、「琉球美、造形研究会」の第4回定例研究会を開催いたします。

今回の定例研究会は、出土遺物を実際に観察し検討するというので、初めての対面形式といたしました。

まだ、沖縄県内は新型コロナウイルス感染の蔓延が収まらず、厳しい状況の中にありますので、感染予防への配慮をしていただきながら、遺物をしっかりとご覧になり、活発な意見交換をしていただきたいと思います。

県外の会員、また、会場にお越しになれない会員は、Zoomでのご参加となりますが、この会場はweb対応の全くない施設ですので、Wi-Fiルータを持ち込んでの配信となります。

幸い、琉球大学人文社会学部教授の大胡先生のご協力で機器をご提供いただき、操作までしていただけることになりました。本当に感謝しております。

さて、皆様もご存じの通り、6月1日、2日の琉球新報に、安里進氏の「ホゾ穴と正面向き復元 検証・首里城大龍柱」が掲載されました。私が投稿し3月15日、16日の琉球新報に掲載された「首里城大龍柱 技術検討委への指摘」への反論です。

あくまで私個人の立場で投稿した原稿ですが、本研究会の会長を務めさせていただいている立場でもあり、本研究会、そして本日の発表内容とも関連することでもありますので、簡潔に説明させていただきたいと思います。

私の「首里城大龍柱 技術検討委への指摘」は、(上)(下)に分けての掲載で、(上)は主に絵図に関わること、(下)が安里氏の「戦前大龍柱は欄干に連結していたのか-西村説の検証」についての指摘でした。「戦前大龍柱にホゾ穴は存在しないという事実」の論考手順や方法が通常では考えられないものであり、データの改竄、捏造報告に当たっているのではないかと指摘しました。安里氏の記事はこの(下)についての反論です。

安里氏がこの記事の中で、「新たに入手した」東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵の写真を公開したことにより、大龍柱のトグロ巻部の背面が写された写真の存在が明らかになり、私が指摘した論拠によるデータの改竄、捏造報告にはならないことが明確になりました。

これについては、研究上の不正(データの改竄、捏造報告)を告発し調査委員会の設置を要求していた沖縄総合事務局と沖縄県立芸術大学に対して6月3日付で告発を取り下げました。琉球新報にも、読者に対して「データの改竄、捏造報告」と指摘した論拠についてはお詫びしたい旨伝えました。

1枚の写真が示す事実に対し、研究者として謙虚な姿勢で臨みたいと思っています。

しかし、安里氏の論考手順や方法が通常では考えられないものであることは事実であり、別の疑義は生じています。

安里氏はこの新たに入手した写真について、ホゾ穴の深さとカスガイ溝の深さの関係から、「欠損部にはホゾ穴はなかったと私は考えている」としていますが、カスガイがホゾ穴の部分でなくその周りの無彫刻部分に嵌め込まれた可能性もあり、報告書で示したように「戦前大龍柱にホゾ穴は存在しないという事実」とは断定できません。

何よりも、ルヴェルトガの写真により王国時代の姿が明らかになり、横向きの大龍柱が描かれた尚家文書(1846年)から1877年までに大龍柱の向きを変えた古文書も発見できないにも関わらず、論理破綻の「暫定的な結論」として相対向きを押し通すことは、1枚の写真が示す事実に対し、研究者として当然の謙虚な姿勢とは言えません。

推測による復元は断じて行ってはいけません。現段階では、ルヴェルトガ写真の示す姿が唯一確実な歴史的事実です。これが「暫定的な結論」となるべきなのは明らかです。

そして、もしも、1846年から1877年までに大龍柱の向きを変えた古文書が発見されれば、相対向きに直し、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵の写真を詳細に検討するなどしてホゾ穴の存在を証明できれば台石を撤去するという、冷静で科学的な対応こそがとられるべきでしょう。

今回、この定例研究会で、沖縄県立埋蔵文化財センターのご協力のもと、カスガイ跡などが残る出土遺物を直に観察し、西村貞雄先生のお話を伺い、意見を交換できるというのは、このような安里氏との議論の中にいる私にとって、実に有難い機会となりました。会員の皆様にとってもそれぞれの認識を深める有意義な機会となりますよう、期待を持って開催したいと思います。

それでは、西村先生よろしく願いいたします。